

ふれあいの囲碁 ポン抜ゲーム

少子高齢化の進む現代社会では、人と人のふれあいの場が減少し、次代を担う青少年においては、信じてほしい「いじめ」問題などが発生しています。また、ゲーム産業や通信産業などの発達により、個人が人とふれあうことなく楽しむことのできる環境が形成され、相手を認め思いやりを持つて接していこうとする姿が社会生活の中で失われつつあるという状況が生じています。

そんななか、子供も大人も、共に生き生きと活動を続けている人達があります。囲碁を通じたふれあいの輪を広げている人々たちです。囲碁を単にゲームとしてだけでなく、「こころとこころのふれあいの手段」として活用する運動が全国各地に広がってきています。すなわち「ふれあい囲碁ネットワーク」という組織です。これを立ち上げたのは日本棋院棋士安田泰敏九段です。この組織に賛同し、本地区に於

ての普及活動を始めたのが十数年前からです。実際の小学校とか児童館での子供達との対面は本当に楽しみです。

ポン抜ゲームの「囲めば石が取れる」という基本ルールの説明は、一分間だけです。子供達はすぐルールを理解して、どんどんゲームを始めます。自分で考えて、置いた石で相手の石を囲んで取れた時の子供達の驚き、嬉しさ、喜び、楽しさというのは、それはそれは大変なものですよ。その目の輝き、表情のすばらしさは自信に満ちあふれています。そして相手と互いに心を開いてすぐ友達になります。ゲームは相手があつて成立するものです。始めの「よろしくお願ひします」と終りの「ありがとうございました」のあいさつは必ず云うようにしております。礼に始まり礼に終るのが基本です。無論、ポン抜ゲームとは子供達だけのものではありません。老若

男女誰でも簡単にルールを理解でき、ゲームを楽しむことができます。時には父親又は母親同伴で参加する子供もおりますが、大歓迎で親子一緒に楽しんでもらっています。家へ帰ってからも更に楽しんでもらえればと思っております。

私の現在の活動範囲は道塚小学校ワークショップ及び夏休みみわくワクスクール、多摩川児童館、下丸子児童館、仲池上児童館となっております。他にも要望があればできる限り応じていきたいと考えております。

連絡先
〇三―五七二〇―四〇〇
宮腰義昭(多摩川)

事務局よりお詫びと訂正

本紙第四十八号で特集した記事に、以下の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

- 一、カマタ映画座(蒲田ヒカリ座)の説明で、経営者は「水越梅太郎氏」とご紹介しましたが、正しくは、「水越武夫氏」です。
- 二、蒲田アポロ座の閉館時期を昭和四十年代と記載していましたが、正しくは、昭和五十年代閉館です。
- 三、地図に記した映画館の位置が、一部正しくない箇所がありました。

読者の皆様からのご指摘と、ご助言をいただきました。ありがとうございました。いずれかの機会に正しい内容をお知らせできたらと考えております。

今後、情報紙に対するご意見やご感想などありましたら、ぜひ事務局までお寄せください。

地域情報紙「かまにし17」事務局
蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七十一―二―七
(三七三二)四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	31,659人
	女	29,122人
	計	60,781人
世帯	33,544世帯	

平成25年8月1日現在

平成25年9月1日発行

かまにし

発行 地域力推進蒲田西地区委員会
編集 地域情報紙編集委員会

第49号

わがまちの顔

日本舞踊 花月流家元

花月 祐里さん

本年二月十七日、国立劇場大劇場で開催された第八十八回、女流名家舞踊大会(東京新聞主催)に、花月流三代目家元、花月祐里が出演し、荻江節『鐘の岬』を舞った。荻江節は一中節、河東節、宮園節と並んで古曲と呼ばれている。吉原など遊郭の座敷芸として発達してきたため長唄に比べ地味で渋く、枯れた江戸情緒を表現する音曲である。

『鐘の岬』は長唄の『京鹿子娘道成寺』を元にした作品で、歌詞はほぼ同じだが、長唄のように曲調の変化やメリハリに乏しく、囃子も使わぬ三味線曲である。派手な衣装の引き抜きがあるわけではなく、最後まで観客を引き付け続けるのは非常に難しい曲目と言われている。

祐里は流派を背負う自負と責任感のなかで舞台に立った。単調な曲の変わり目ごとに、微妙に心の変化を表現し、小手先のテクニクを超えて、最後まで緊張感を維持しながら見事に演じ切った。観客席と舞台を一体化した空間を造ることに成功した。

祐里は川崎市中原区に昭和四十七年に誕生した。母は花月流二代

目家元、花月緑。祖母は花月流名家家元、花月超園である。首元までどつぷりと日本舞踊に浸かった。エリート一族のなかで成長した。ご多分に漏れず、初舞台は三歳で、『禿』を踊り神童ぶりを発揮した。大学卒業と共に西川喜久輔に師事して、古典舞踊の研鑽を積み、平成二十一年東京新聞主催、全国舞踊コンクールの邦舞部門に出場し、義太夫『萬歳』で入賞を果たし、邦舞界にその実力を披露した。



春興鏡獅子 国立劇場

平成二十二年四月、国立劇場大劇場にて三代目家元襲名披露公演を開催、長唄『春興鏡獅子』を演じた。歌舞伎の場合は通常立役が演じ、前半を如何に優美に見せるかで苦労する。しかし、今回は逆である。すべて後半の勇壮な獅子にウエイトが掛る。祐里は圧倒的

な迫力で後シテを押切り、名実ともに家元の實力を示した。

そもそも花月流は、昭和五年に花月緑翁(前・兼久)によって創立された。当時としては新しい大衆性を備えた舞踊として「小唄振り」「レコード舞踊」「新内舞踊」など独自の芸風を築きあげた。また、コロムビアレコードの専属振付師となりレコードによる大衆舞踊普及に功績を残した。家元の承継に際し、分家花月兼紀美江(後・超園)の長女花月緑が選ばれ、昭和五十二年、二代目家元を継いだ。二代目家元の長女である祐里は長男の出産を機に、川崎市中原区から現住所である大田区多摩川二丁目に移転してきた。地元の大田区日本舞踊連盟に加入し、毎年秋に開催される連盟と文化振興協会共催の「舞踊公演」に三年連続して出演している。昨二十四年は、第三十回記念公演で、区民ホールアプリコでの地方(じかた)入りの本格開催となった。

祐里は清元『神田祭』を演じ、町娘が、おかめ、ひよっとこのお面を使い分けるユーモラスな踊を披露し会場を沸かせた。「仕事の本拠地は川崎であるが、今後も住んでいる大田区のために貢献出来るものを積極的に行っていきたい」と本人は語っていた。

(取材 都築委員)

松竹キネマ蒲田撮影所 スター特集 女優編

前号に引き続き蒲田と映画の話を取り上げてみる。

松竹蒲田で特筆すべきは映画専門女優を育成したことにある。これまでの映画（活動写真時代）は女優を使わず、ほとんど歌舞伎の女形役者が女の役を演じていたのである。このことは日本映画界にとって画期的なことであった。

今回は、松竹キネマ蒲田撮影所で育った大輪の花の中から、大正時代を代表する女優を紹介していく。

川田芳子（明治二十八年〜）

新潟市古町通りで生まれる。

芳子の祖母・川田トシは二十代の若さで、舞踊・市山流の四世家元を継ぎ七十世を名乗った、踊りの名手であった。



トシの一人娘が芳子の母・イネである。踊りを嫌い、画家を志し東京に出る。

南面の職業画家となり、やがて結婚し長女・亀をもうけたが離婚し、新潟へ戻った。多感な生活のなかで富貴、芳子の二女を産むが、ともに父親の異なる私生児であった。芳子は幼少より踊りを祖母に、南面を母に習った。祖母は踊りの素質と美形な容姿から、芳子を溺愛した。

明治四十年春、祖母・トシは母・イネの手からもぎ取るように芳子を連れて東京へ出た。芳子の芸者修行が始まった。藤間勘翁について歌舞三絃を修め、壽福の名でお披露目したのは明治四十二年秋、十四歳であった。

美貌の芳子は、たちまち売れっ子となり、川上音二郎や松竹社長、大谷竹次郎の目にとまった。大正三年、音二郎に口説かれ、日本で最初の芸妓出身の女優となった。音二郎の妻・川上貞奴に養女分として預けられ、貞奴一座の座員として帝劇で初舞台を踏んだ。大正九年、松竹は映画制作に乗り出し、松竹キネマを創立した。

大正三年六月、女優養成所は閉鎖、座員三十人の狭衣一座は巡業の旅にでた。九州、四国まで足をのばし、貧困の地方回りは大正五年まで続いた。

帰京後、将来は舞踊で立たせたいという母の願いから、すみ子は一座を離れ、日本舞踊水木流・水木歌橋の下で修行、大正七年に水木歌江の名で名取となった。

大正九年に蒲田撮影所が開設。すみ子は父と旧知の間柄で監督の賀古残夢から松竹入りを勧められ、母と松竹蒲田撮影所へ見学に訪れた。撮影所長は東京毎夕新聞社時代に父とは記者仲間の田口桜村であり、知った人の下で仕事が出るのであれば、と即座に蒲田入りを決心し、大正十年二月に入社。間もなく十九歳になるうという時であった。

折から、撮影技師であったヘンリー小谷が監督に転じ、監督就任第一号作品として『虞美人草』が決まっていた。すみ子は探していたヒロインのイメージと合致し、ヒロインに抜擢された。撮影は長期にわたり、封切りは翌年の四月になったが、この一作で栗島すみ子は一躍スターの座にのし上がった。

大正十二年九月一日、関東大震

芳子は蒲田撮影所が開設された直後の同年七月に入社した。

第一回作品は、現代劇『島の女』で、大谷社長がハリウッド帰りのヘンリー小谷に撮影を命じた。千葉の富浦海岸でのロケは、大谷社長自ら陣頭指揮をとり、二日間で撮り終え、同年十一月一日、山田耕作指揮の大交響楽団とともに、歌舞伎座で公開された。日本髪がよく似合う新潟美人の典型で、悲劇のヒロインにうってつけの芳子はさらに『金色夜叉』で人気を決定づけた。

大正十四年、京都下加茂撮影所の閉鎖により蒲田で時代劇が作られる頃から時代劇女優としての活躍が増えてきた。

昭和に入り、名子役・高尾光子と組んで一連の母物映画で女性ファンを紅涙をしばり、野村芳亭監督の『母』シリーズに主演し、母親役者の第一人者となった。

戦後、松竹大船にて『悲恋模様』、続いて『鐘の鳴る丘』でカムバックしたが、直後に映画界からは引退。養女に先立たれた芳子は、埼玉県草加市のアパートで一人暮らしを始め、誰ひとり看取る者もなく、昭和四十五年三月二十三日、心臓病で死去。七十四歳。

災の最中、新人監督の池田義臣（後に義信）は大混乱のなか、母親と二人で小石川の自宅にいたすみ子を助けようと駆けつけた。この必死の行為に女心をゆさぶられ、池田と結ばれた。栗島すみ子の蒲田時代の全作品は百十八本であるが、そのうちの七十三本が池田義信監督作品である。

戦後、昭和二十九年東京水木会会長に就任、水木紅仙と改名、弟子には淡島千景（水木紅景）、池内淳子（水木紅澄）など多彩。全国に数万の弟子をもつ日本舞踊・水木流の頂点に立つも、昭和六十二年八月十六日、腎不全で死去。八十五歳。

五月信子（明治二十七年〜）

本名・前川しのぶ、埼玉県浦和生まれ。浦和警察署の署長をしていた父・潔と母・芳子の仲には三人、男三人の六人子があり、しのぶは長女であった。

大正四年、高等女学校を卒業後、新劇を志して、東京神田の日本座で旗揚げした新日本劇に入団、第一回公演『枝川の流れ』で初



新劇を志して、東京神田の日本座で旗揚げした新日本劇に入団、第一回公演『枝川の流れ』で初

栗島すみ子（明治三十五年〜）

すみ子は、東京府渋谷村に生まれた。現在の渋谷道玄坂あたりである。父方の祖父は綾瀬川という力士であった。次男として生まれた父・山之助は大学卒業後、東京朝日新聞社へ入社。相撲記者となるが、その一方、劇作家・岡本綺堂らと文士劇「若葉会」を組織して芸名・栗島狭衣を名乗り座長、作家、俳優を兼ねるといふ多芸多才の人物であった。すみ子は山之助と母・静子との間に生まれた一人娘である。



大正二十年十月、神戸市湊川新開地に娯楽場・聚楽館が開設され、女優養成所も併設された。

狭衣は養成所主幹として招かれ、すみ子も座付き女優劇団メンバーとして同行した。

この以前、明治四十一年には、すみ子は学齢に達し、芝の巴小学校に入学したが、父が自ら教育するからと、すぐに退学し、その後は一日二時間、父の教育を受け、神戸時代も変わらなかった。しかし、聚楽館は不入り続きで

し、三十余名の座員を擁し浅草公園劇場で旗揚げ、全国を巡業する。劇場公演の間にも、太秦発声映画でトーキーもの『紺屋高尾』、『瞼の母』に映画出演をした。戦時中は東南アジアへも巡業したが、戦争の激化により一座を解散し、芸能界を引退した。

昭和三十四年七月二十四日朝、脳溢血のため死去。六十六歳。

田中絹代という大女優については、本紙第四十号で取り上げているので、今回は省略した。

松竹蒲田出身の大物女優は、田中絹代と今回紹介した三名の他に、柳さく子、松井千枝子、筑波雪子、川崎弘子、飯田蝶子、八雲恵美子、吉川満子、高峰秀子等々が、キラ星のごとく輝きを放っていた。男優編とともに今後機会があれば紹介していきたい。

参考文献

日本映画人名事典 女優篇
人物・松竹映画史 蒲田の時代
かりそめの恋にさえ
女優・川田芳子の生涯

（取材 都築委員）